

内房沿岸に生息する野生ネズミにおける広東住血線虫 (*Angiostrongylus-Cantonensis*) の寄生状況

工藤 幸子, 酒井 利郎, 海保 郁男
時技 正吉, 太田原美作雄

A Distribution of *Angiostrongylus-Cantonensis* in Field Mice on the Coast of Tokyo-bay in Chiba Prefecture

Sachiko KUDO, Toshirou SAKAI, Ikuo KAIHO
Masayoshi TOKIEDA and Misao OHTAWARA

I はじめに

広東住血線虫 (*Angiostrongylus-Cantonensis*) は、東はハワイから西はマダガスカル島、北は日本から南はオーストラリア北部と広汎な地域のネズミ、陸生軟体動物間に分布している。

ところで、ネズミ、人は中間宿主である陸生貝 (カタツムリ等)、ナメクジ等を生で食することによって感染する。

また、人では幼虫が脳脊髄に浸入して好酸球性髄膜脳炎 (Eosinophilic meningoencephalitis) を引き起こすために注目されている。

日本では既に、南は国吉、西村ら¹⁾ (1965) が沖縄本島のクマネズミより、北は大林、折原ら²⁾ (1968) が札幌市のドブネズミより本種を検出、報告している。

更に関東地区については堀、宮本ら³⁾ (1969) が横浜、川崎港湾地区の家住性ネズミより、又堀、楠井ら⁴⁾ (1972) が東京港湾地区の家住性ネズミより本種を報告しているにすぎない。

今回、私達は千葉県内房における本種の浸淫度を把握する目的で終宿主である、野ネズミにおける寄生状態を調査し、若干の知見を得たので報告する。

II 材料および方法

材料) 野ネズミは1984年7月より11月にかけて、千葉地区、富津地区、浦安地区の三地点にネズミ捕獲器を設置し、生捕りを試みて捕獲したものである。

方法) 生捕り後の野ネズミは直ちに開胸、開腹し、

肺、肝、脾、腎の臓器を採取し、10%ホルマリン液で固定した。その後、型のごとく薄切組織切片を作製し、ヘマトキシリン・エオジン染色をほどこし、病理組織学的検査を行った。

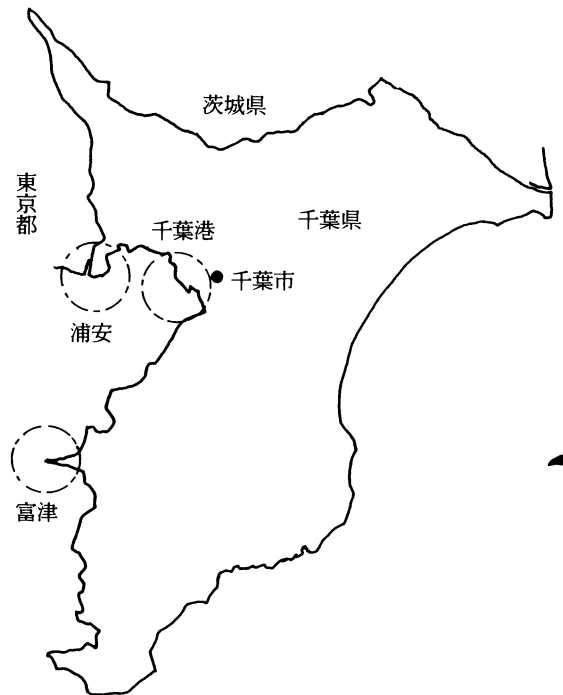


図1 捕獲調査を行った三地点

III 結果

検査したネズミは、千葉地区30匹 (雌21, 雄9)、富津地区40匹 (雌22, 雄18)、浦安地区28匹 (雌16, 雄12) で、いずれもドブネズミであった。

このうち広東住血線虫が肺胞内に寄生しているのが認

千葉県衛生研究所

(1987年9月30日受理)

表-1 三地区における野ネズミの広東住血線の感染率

捕獲地区	雌雄	匹数	感染匹数	感染率(%)	Total(%)
千葉地区	雌	21	0	0	0
	雄	9	0	0	
富津地区	雌	22	6	27.3	35.0
	雄	18	8	44.5	
浦安地区	雌	16	3	18.8	14.3
	雄	12	1	8.3	

められた症例は富津地区14匹(雌6/22, 雄8/18) 14/40=35%, 浦安地区4匹(雌3/16, 雄1/12) 4/28=14.3%で, 千葉地区では全く寄生が認められなかった。

また, 本線虫の生活史は図-2に示したごとく, 成虫がネズミの肺動脈に寄生し, 雌から排出された虫卵は肺毛細血管→肺実質内で約6日後にふ化して第一期幼虫が形成される。これらの幼虫は肺胞内→気管支→消化管を経て便中に排出されると言われている。

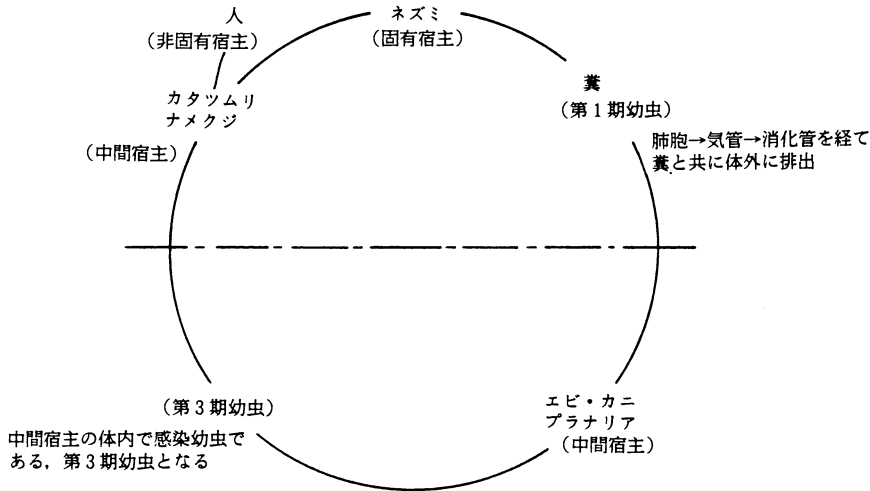


図2 広東住血線虫の感染経路

私達の病理組織検査でも肺胞内に第一期幼虫の存在を認めた症例が大部分であった。又, 肺, 腎, 脾の各臓器には本線虫の存在を認めなかった。

しかし, 肝組織内に他の寄生虫(帯状囊尾虫 *Cysticercus-fasciolaris*)の存在を認めた症例が富津地区で3匹, 浦安地区で1匹確認出来た。それらは何れも広東住血線虫と共に感染していた症例である。

IV まとめ

千葉県内房沿岸の千葉地区, 富津地区, 浦安地区の三地点で野ネズミについて広東住血線虫の検索を行なったところ, 富津地区35.0% (14/40), 浦安地区14.3% (4/28)の高率で広東住血線虫 (*Angiostrongylus Cantonensis*) が寄生していることが明らかになった。

広東住血線虫は人畜共通の寄生虫症となるので注目されている寄生虫である。

本種が生育して人に感染する際, 中間宿主を必要とする。特に人家の隣接する地域では疫学上重要な問題であると考えられる。

我国では沖縄本島を除いては本線虫によって起因した

好酸球性髄膜脳炎の症例は未だ報告されていない。

しかし, 寄生した野性ネズミの増加により, 本線虫の定着も考えられるので, 今後も調査を続けて, その動向を監視する必要があると思われる。

文献

- 1) 国吉真英, 西村謙一 (1965): 沖縄本島から得た広東住血線虫 *Angiostrongylus* について, 寄生虫誌 14, 655~656.
- 2) 大林正土, 折原美代治 (1968): 札幌市のドブネズミから得られた広東住血線虫 *Angiostrongylus Cantonensis* (chen 0935) Lougherty, 1946について, 寄生虫誌 17, 1~4.
- 3) 堀栄太郎, 宮本健司, 池田修, 阿部久夫, 中況治 (1969): 横浜, 川崎港湾地区における住家性ネズミ類の内部寄蟻虫類, 特に広東住血線虫の調査研究, 寄生虫誌 18, 258~264.
- 4) 堀栄太郎, 楠井善久 (1972): 東京港湾地区における広東住血線虫の調査研究(1), 住家性ネズミ類についての調査, 寄生虫誌 21, 90~95.